

MOKU

7
2007
Jul
vol.18



山下泰裕・高橋史朗

柔道家・東海大学教授

明星大学教授

山下泰裕の
入づくり

〔特集〕

農力主義

田んぼへ入ろう!・永島敏行
「持たない」という選択・辻 信一
食べ物は商品じゃない・美斎津育夫

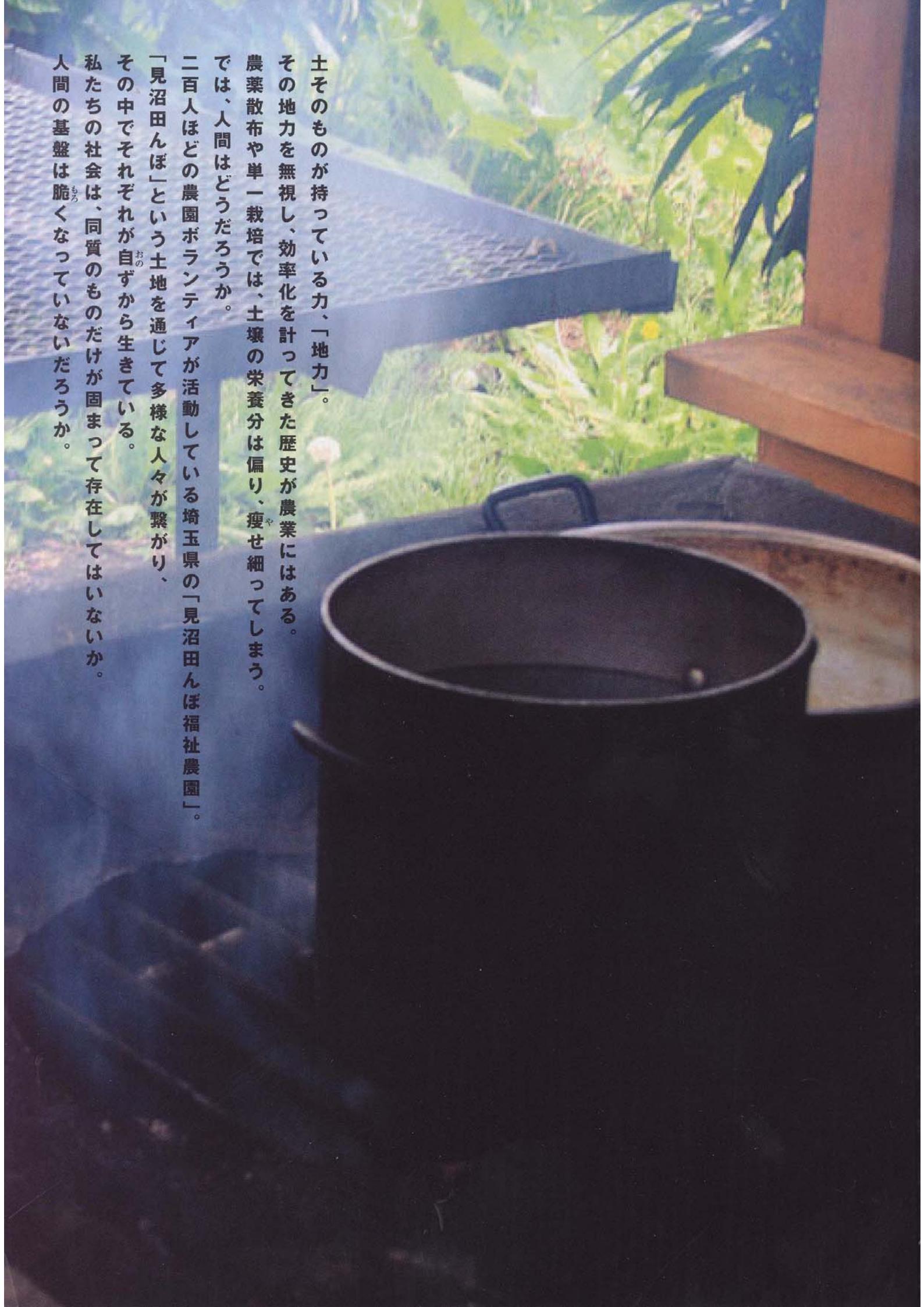
特集

農力主義

「見沼田んぼ福祉農園」み
沼 という接点

地の力、人の力





土そのものが持つていてる力、「地力」。

その地力を無視し、効率化を計ってきた歴史が農業にはある。

農薬散布や単一栽培では、土壤の栄養分は偏り、痩せ細ってしまう。では、人間はどうだろうか。

二百人ほどの農園ボランティアが活動している埼玉県の「見沼田んぼ福祉農園」。「見沼田んぼ」という土地を通じて多様な人々が繋がり、

その中でそれぞれが自ずから生きている。

私たちの社会は、同質のものだけが固まって存在してはいなか。

人間の基盤は脆くなつていなか。人間の基盤は脆くなつていなか。

貨幣価値に換算される情報と人間が生きていくための知識

「この辺りも、以前は屋敷森のある昔ながらの家ばかりだつたんだけどねえ。僕も新住民だからあまり言えないけど、開発なんていうのはあつと言えますね」

埼玉県さいたま市。JR武藏浦和駅から車で十五分ほど行つたところで、ハンドルを握っていた猪瀬良一さん（五十七歳）がふともらした。窓の外にはどの地域にもあるような今風の家々が建ち並ぶ。しかし、そこからわずか数分後、ふいに住宅がなくなり大地が広がる。

「ここからが見沼田んぼ。アルファベットのYの字に広がっているんです」

埼玉県南東部に広がる「見沼田んぼ」。その広さは約一二六〇ヘクタール、東京都・千代田区の面積ほどもある広大な緑地帯である。

かつては湖沼だった。江戸時代の初めに灌漑用水池がつくられ、享保の改革期には水田が拓かれた。また、いざといふときには、見沼田んぼを水没させ、戸の町を水害から救う治水の役割も期待されていたのだ。

そのYの字の枝分かれの部分に当たる、

「おはようございます」

福祉農園に着くと、あちこちから気持

さいたま市緑区南部領辻に、猪瀬さんが代表を務める「見沼田んぼ福祉農園」はある。

◎
「吉田君！ これ、持つていって」と、オオバコの茎を二本持つて大人の間を往き来していた小学四年生の吉田高壯君はその声に従つて、野菜クズを手押し車で堆肥場へ。農園内に数箇所ある堆肥場には雑草や野菜の皮が積まれている。

「これは、ちようどいい頃ですね」

猪瀬さんが指差した堆肥は、湿り気もさほどなくふかふかの状態。臭いはほと



竈の火を見る人、作業台で玉ねぎを刻む人、その多くは二十代。手分けして昼食の支度にかかっていた。

「今は、『バリアフリー』なんて騒いでいるけど、見れば分かる通り、もともと農道つてバリアフリーなんですよ。階段なんてないしね（笑）」

広がる芝生の広場、三つの農園。確かに猪瀬さんの言葉通り段差のないこの農園内には、現在、七団体、約二百人のボランティアが農作業を行つてている。

農園を訪ねた土曜日は、若手の農業ボランティア団体「見沼・風の学校」のスタッフが集まっていた。週末は彼らが主となり、土づくり、野菜やハーブ園づくり、また農園全体の管理や環境整備なども行う。

◎

んどなかつた。



「見沼田んぼ福祉農園」代表、猪瀬良一さん

吉田君は父親の一也さんと来ていた。吉田さんは浦和北口一タリーカラーブの面々が管理する畑を耕すために週に一度は農園に来ていると言う。自宅にも家庭菜園があり、元々土に触れること、野菜をつくることは好きだつた。

「土に触れた体験があるかないかでは、子どもにとつても全然違うと思うんです。子どもにとつてはちょっと違うでしょ? こんなふ考えたけど、黙々と一人でやると、こ

うに世代の違う人たちと共同で何かができる。そういう場があるというのは、自分の了見を広げることにも繋がると思うんですよ。僕にとつても、子どもにとつてもね」

吉田君は父親の一也さんと来ていた。吉田さんは浦和北口一タリーカラーブの面々が管理する畑を耕すために週に一度は農園に来ていると言う。自宅にも家庭菜園があり、元々土に触れること、野菜をつくることは好きだつた。

「土に触れた体験があるかないかでは、子どもにとつても全然違うと思うんです。子どもにとつてはちょっと違うでしょ? こんなふ考えたけど、黙々と一人でやると、こ

うに世代の違う人たちと共同で何かができる。そういう場があるというのは、自分の了見を広げることにも繋がると思うんですよ。僕にとつても、子どもにとつてもね」

うに世代の違う人たちと共同で何かができる。そういう場があるというのは、自分の了見を広げることにも繋がると思うんですよ。僕にとつても、子どもにとつてもね」

◎

福社農園ができたのは九年前。猪瀬さんが二十一年前に県に出した「福社農園建設の要望書」が発端となり、県から委託を受けて土地を管理している。

一九七〇年代から始まつた減反政策以来、見沼田んぼは水田から畑への転作、また後継者不足による耕作放棄地も広がつていた。

「生まれは東京です。こつちに来たのは、結婚してから。都内に住んでいましたが、長男が生まれて、妻の職場が浦和にあつたので都内から通うのもなかなか難しくなつて……」

猪瀬さんの長男である良太さんには知的障害がある。自閉症だと分かつたのは三歳の頃。そのとき、猪瀬さんの父親は言つた。「昔は十人ぐらい子どもがいる家がざらにあつたんだ。障害を持つて生まれてくる子も珍しくなかつた。お前が今、どう思つているか知らないが、俺にとつては何ら変わりがない、良太は可愛い孫なんだ」と。

福社農園ができたのは九年前。猪瀬さんは、その自立の場を「農」に見出した。良太さんにとってこの農園は職場。平日は「ディケアわくわく」のメインメンバ

ーとして働いている。

「農」に活路を見出したのは、良太さんだけではない。猪瀬さん自身も生きるうえで問い合わせ少なくなかった。

「一度、こつちの世界に入ると、もう『稼ぎ』の世界には戻れないと思うんですよ。以前はコメや農業などについてインターネットをするフリーの記者をやつっていました。テレビ番組の企画なんかもやつていたけど危なかつたと思うよ、特にバブル期はね。ただ、少しでも農業に触れていたから、大きくズレなくてすんだのかかもしれない。

例えば、小さなテーブルの上で何千億と動かす人も世の中にはいるでしょう? でも、そういう生き方つて何か違うよなって思つていたんです。

実際に土を耕してみてはつきりしました。人一人が一日に食べる分を耕すのに、

その一言に猪瀬さんは救われた。その後、良太さんが進学する度に訴えてきたかいもあり、良太さんは普通学級で学校生活を送ってきた。しかし、やはり気にかかるのは、自分の死後。「息子が生きていられる拠点をつくりたい」。猪瀬さんは、その自立の場を「農」に見出した。良太さんにとってこの農園は職場。平日は「ディケアわくわく」のメインメンバーとして働いている。

「農」に活路を見出したのは、良太さんだけではない。猪瀬さん自身も生きるうえで問い合わせ少なくなかった。

「一度、こつちの世界に入ると、もう『稼ぎ』の世界には戻れないと思うんですよ。以前はコメや農業などについてインターネットをするフリーの記者をやつていました。テレビ番組の企画なんかもやつていたけど危なかつたと思うよ、特にバブル期はね。ただ、少しでも農業に触れていたから、大きくズレなくてすんだのかかもしれない。

例えば、小さなテーブルの上で何千億と動かす人も世の中にはいるでしょう? でも、そういう生き方つて何か違うよなって思つていたんです。

実際に土を耕してみてはつきりしました。人一人が一日に食べる分を耕すのに、



汗がどのくらい必要かが身をもつて分かることです。その視点から経済を考えてみると、貨幣価値に換算されるような情報と、人が生きるために必要なものを得るための知恵や汗とでは違うと分かる。品格のようなものが違う気がするんですよ。さまざまな価値観がある中で、結局は、どこを信頼して、どこと共同するのかということなんでしょうね。

吉田さんが所属している浦和北ロータリークラブから、最初は寄付の提案を受けたんです。でも、寄付より一緒に汗を流しませんか？と誘ったのが半年前。それで、実際に汗を流す実業家が誕生しました。面白いですね（笑）。

彼らはモノやお金だけではなく、環境に対する社会貢献という方法もあると考えたのでしょうか。耕作放棄地が増えている見沼田んぼの一画を耕すということですね。経済的に貧しい国にモノを送ることも必要です。遠くを見るのも大事です。でも、足元を見直すこともいいんじやなかつて思うんですよ。

「農」は自分の行為に 矜持きよしを持たせてくれる

十二時。昼食は、カレーライスと塩も



みしたラディッシュ。ゆでたとうもろこしは、ここへ通い始めて八年になるという岩田真由美さん（二十七歳）からの差し入れ。彼女の実家は農家。しかし、「機械化されているから、そんなに手伝うこととはなかつた」と言う。

竈の隣にあるテーブルを、小学生、大学生、二十代、五十代、六十代の社会人が囲んだ。

「いただきます！」

待ちきれずに大きな声を出した吉田君に、「学校でもそうなの？」自分のことばかりじゃなくて、人の話もちゃんと聞かないといとダメだよ」と周りの大人から一言。皆の昼食の挨拶になつた。

大人の真ん中で一人はしゃぐ吉田君に、「ここには子どももたくさん訪れる。しかし、「子ども」扱いはしない。火や鍬や鎌がある農園は危険な場所でもある。だからと言って、はなから体験させないのではない。農園に来た多くの若者も代表の猪瀬さんさえも、初めは鍬の持ち方すら分からなかつた。竈の火の番どころか、マッチを擦れない若者もいたといふ。身をもつてしか学べないことがあると、大人たちも実体験から学んでいるの



常に緊張感を持つて目を配る大人の中で、子どもたちも自分にとっての安全基準や社会のルールのようなものを自然と身に付けていく。

「風の学校」のスタッフの一人である、植松潤さん（二十四歳）は、現在大学院で環境教育を学んでいる。農園と出会って六年目。ここに来たことがきっかけで、今の道へ進むことになった。

◎

初めて来たのは浪人生の頃。高校時代の友人に誘われたんです。元々法学部志望でしたが、農園がきっかけで環境教育に興味を持つようになりました。要するに、はまっちゃったんですね（笑）。

それまでは、「土に触る」という経験や皆で何かをすることに飢えていたんだと思いません。ものをつくること自体に憧れのようなものもありました。後々は教師として現場に出たいとも思っているので、今ここでやっていることと学問がすごくリンクしているんです。もちろん課題もあるんですけど……。

以前は、ここで環境教育の実践のよななものもやつていました。週末には小学生の「のうぎょう少年団」が来ていました。でも、子どもに意識を集中すると、本来の自分たちの農作業がなかなか手に



付かなくなってしまった……。子どもを受け入れるだけのスタッフの技量ができるからでも遅くはないと思って、今は少年団を休止して、自分たちの訓練中です。ただ、最近は、畑にいることで危険の判断基準が自然に身に付いていくんだと分かってきました。学校の指導要綱のようなカリキュラムで「これは良し、これはダメ」という基準をつくるのではなく、作物を育てていくと身体を通じて自然と学び取ることができる。それに、周りのことも見えてくるようになるんです。作物を育てることは、教育に自ずと繋がっています。そういう「農」の在り方は貴重ではないかな、と。

「なぜ、若い人がこうして集まつて来るんですか？」とよく聞かれますが、むしろここに来ないともつたいない（笑）。ものをつくること、育てること、それを食べることまで全部自分でできるんです。機会があるのにやらないなんてもつたないです。頭で考えるよりも、感じられるものがたくさんあるんですから。

例えば、これから季節はどんどん雑草が茂ってきます。ここは農薬を使っていないので、夏場はすごいんです。正直言つて草取りはきつい。その日はどつと疲れます。でも、三日も経つと、作物の勢いの違いを目の当たりにすることになります。自分が働きかけた行為を作物が成長という形で表してくれるんです。それが僕の労働への対価になるんですね。些細

てくるんでしょうね。

今は、農業体験をするための宿泊施設も全国にあります。そのような形でも農業に触れられるけど、田植えや収穫のみといった「いいところ」になってしまふようなところもある。生活から切り離された農業体験ではなく、持続的で生活の一部として活用できる場として、見沼はとても意味のあるところだと思ってます。そういう「農」の在り方は貴重で

なことと思うかもしれません、自分の行為に「矜持」のようなものを持てるようになつた気がします。きっと農家の方がプライドを持つて仕事をしているのは、こういう面も感じているからなのでしょう。

僕は大学の四年間を除いて、ずっとこの近くで育ちました。見沼田んぼの近くの清掃工場へも社会科見学で行きましたが、「見沼田んぼ」として意識したのは、やはり農園に来てからです。

ここで土を耕していると、見沼つてどういうところなのか知りたくなる。調べずにはいられなくなつたりするんです。「風の学校」の勉強会でも周りの農家の方たちにお話を聞いていますが、おかげで土地に根を張つて生きている人、その土地 자체が持つている文化や歴史をとても明確に意識できるようになつたのではありませんかな。

こういう場がなかつたら、住んでいるマンションや子ども会、自治会単位でしか、この土地を見ることができなかつた。ことはなかつたと思います。ここ数年は自分と埼玉の見沼という場所が深く繋がっている。そんな感覚を持つようになりました。

◎

ボランティアって、他者と出会う行為だと僕は思うんです。

都市の中での現代版の共同性は、同質のものが集まつた空間。例えば、農業をやろうとしても、最近流行りのロハス世代と団塊の世代が手を組むことはほぼない。共同の場に異質のものが入り込むことはないんです。障害者や高齢者といつ

土地に住む必然性のある人々が多様性を生む

「見沼・風の学校」のスタッフは、現在三十名ほど。二〇〇二年に立ち上がった「風の学校」は、見沼田んぼのある空間自体を「学校」と捉え、ここに集う人々が学び、実践する場と考えている。日常の農作業に加え、国内外で活躍する農家を「百姓先生」として迎えたり、真夏に行う一週間のサバイバルキャンプや研究事業誌である『見沼学』の発行、公開講座の「農的若衆宿」も行つていて。

若者が集まつてきた背景には、事務局長である猪瀬浩平さん（二十八歳）の存在が欠かせない。彼は猪瀬代表の次男。現在は明治学院大学の講師として「ボランティア学」の講義を受け持つていて。

全国にもこのような場はあつて、例えば横浜にある寿町。ここには社会から排除されているホームレスが集まり、町自体も社会から排除されていると言つてもいい。今は、そこで路上生活者の「自立支援」を促すと、「さなぎ達」というNPO法人の若いスタッフたちが活動しています。核になる五、六十代のホーム

た社会から排除されがちな人々も、最初から抜け落ちているんですね。

この農園のベースになつてているのは障害者です。僕の兄貴も含めて彼らはこの町から「逃げられない」。ここから離れて暮らすとなると、施設へ入るしかありません。ここでは核に彼らがいるから、その周りに人が集まつてくるんです。

農業や「スローフード」に興味がある人も来ますが、その近くでは障害者が作業をしていたり、飛び跳ねていたりする。この状況自体に、僕は大きな意味があるような気がしています。そこに居続ける人がいるから高齢者も来る。ロータリークラブの吉田さんも、子どもを連れて来る。これは、その土地に住むことに何かしらの必然性を抱えた人が基盤になつてゐるからではないでしょうか。動かない核があることで多様性が生まれてくるんでしょうね。



聞くところによると、熊本県の水俣にも同じような印象を受けます。あの土地に住み続いている漁民がいて、水俣の魚を食べ続けている住民がいる。そこへ全国から訪ねてくる人々がいるようなんですね。

社会はどんどん細分化されて、ある種の人たちは排除される一方です。ただ、排除されながらも共生を図っている。そこに何かを見出した異質の人たちが集まつてくる場が各地にあるんでしょうね。

「風の学校」を始めたときから、僕の中では「共同」がひとつ課題になつてきました。

「共同体」というと、さまざまな縛りがあり面倒くさいという意識を持つ人も少なくないと思いますが、近くの農家の方からのお話で、結構「アナーキー」なところもあったと分かりました。

この辺りの子どもたちは、初午（旧暦二月の最初の午の日に行う稻荷祭）のとき神社に籠る慣わしがありました。その期間、子どもたちは「神」と見なされ、たいていのことは許されたそうです。お酒を飲んで二日酔いのまま学校へ行つて、先生は怒らなかつた。これは、「かつ

てのムラは仲良しでした」という次元の話ではないと思うんです。

もちろんムラにも差別やタブーはあつたでしょう。単なる理想社会ではありますせん。ただ、信仰や祭りという装置を通して、解放する時と場所が用意されていました。

講義でこのような話をすると、「そんなこと言つても、昔には戻れないじゃないですか」と言う生徒もいます。でも、短絡的に「昔に戻れ」ということではなく、翻つて現在の日常と非日常との境がないような状態はどうなのか、上下関係が曖昧な状態はどうなのか、現代版の同質的な人間同士の共同しかない社会はどうなのか、という投げかけをしているだ

けなんです。

最近、「風の学校」のスタッフの中では話題になるのは「暮らしの中での共同性」をもつとつくれないかということ。それには、社会とはまた別に、この土地に馴染むルールをつくらなくてはいけない。今は公共領域におけるルールが、全ての共同体に当てはめられるべきルールであるというような錯覚がありますよね? 例えば、未成年の飲酒の取り締まりが、かつては大目にみられていた大学生にまで及んでいるように。

でも、土地やそこに生きる人々に合う臨機応変のルールがあるはずです。見沼をベースにしてそれを考えていきたいと思っています。

僕は昔、浦和の町つて全然面白くないと思っていた。でも、今は面白い。というより面白くできるんじやないかって思っています。

行きの口バスとはまた違つて、今、共同性の領域を潜在的に求めている人たちはあるんだろうな、と。

物理的にも完全に外と内がしつかり分かれているところが現代の特徴です。マ

「自ずから 自由でいられる場

ンションもオートロック。そういう点から言えば、ここは境界領域なんでしょうね。都市と農村、人間と自然、障害者と健常者、若者と高齢者、さまざまな境界を含んだ場なんだと思います。



内にあるビオトープの池に苗を投げ入れていた。

実家が宮城の米農家である面川常義さん（二十歳）が裸足になつて沼に入り、

皆が投げた苗を植えていく。彼は、自分の父親の姿を見ながら「農業を仕事にはしたくない」と数年前まで思っていたと言ふ。が、ここへ来て農業に対する思いは少しずつ変わつていて、「農家ではない人々がわざわざ農業をやつている。なんで？」

「農家の意識を変えたようだ。そんなシンプルな問ひと、「見沼」という別の入口から農業に近付いたことが面川さんの意識を変えたようだ。

「ここの人たちは、案外楽観的なんですよ」

猪瀬さんは言う。

ただ、それは土や自然環境が人間の思うほど甘いものではないと分かつたうえのこと。予定調和などあり得ない中で、人間にはどうにもならないことがあるといふ、ある種の前向きな開き直りでもある。

「自然に向かうときの規律のようなものがないと乱れていきます。その中で、少しでも自分の自由度を獲得しようと思つたら、実際に体を動かして耕しながらでしか次の手は見えて来ないんですよ」

そこには、予定通りに進められることが自由を得る前提だと考える「稼ぎ」を中心とした世界とは、別次元の世界があつた。

◎

昼間から絶え間なく吹き抜ける風に、麦の穂が揺れていた。その畝の間に別の葉が顔を出している。

「サツマイモを植えているんですよ。違う作物を同じところに植えると、地力が偏らないから」

猪瀬さんの案内で麦畑を歩きながら、

経済に沿つて、効率化を求め、一定の土地に同種のものを植えてきた農業の歴史を思い出す。
一括りに植物といつても、必要とする栄養分が少しずつ異なるように、人間にとつても同質のものが固まつて存在する社会は、基盤となる土壤をどんどん痩せ細らせていつてしまうのではないか。そんな思いも浮かんでくる。

「ここは自己表現の場なんですね」

大学生の頃から六年間通つている寺床純三さん（二十七歳）は話していた。

農業と自己表現——。浩平さんの言葉がよみがえる。

「農業という業種や概念ではなく、見沼の土地でここに集まる人たちと行なつてゐる『農』が僕の一部になつていてるんだ。もし農業じやなくて、野球とかだったら（笑）、才能や能力という物差しで測るようになつて難しかつたかもしれない。それに、野球という一つのものに興味がある人しか集まらなかつたでしよう。ここには仕事がいっぱいあります。それも一つの技術では收まらない、いろいろな種類の仕事。だから、さまざま人が集まつてくる。その中で自分がどうするか、なんでしょうね」

